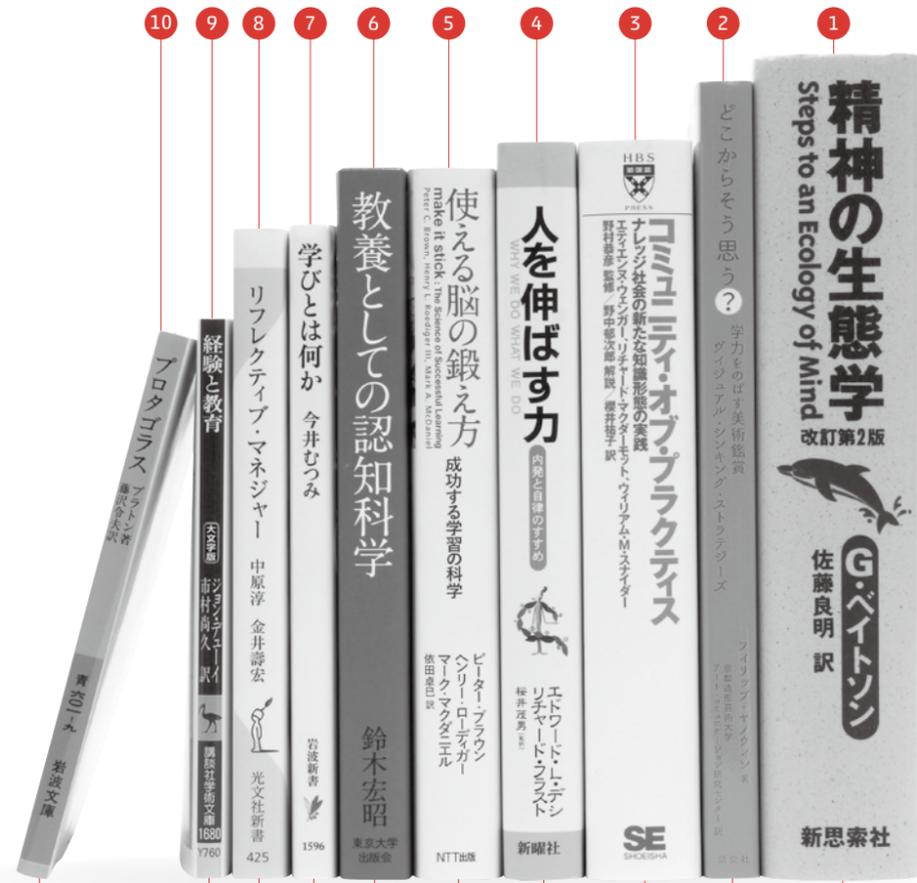


# 学びを 学び直す ための 10冊

私たちは生まれてから、じつにさまざまなことを学んできたのに、学びそのものについて学んだことはあまりなかったのではないでしょうか。本号の特集をきっかけに、長年続けるうちに、習い性となってしまう自らの学びを、見直してみたいかがでしょうか。学びを学び直すためのヒントを与えてくれる10冊を選びました。



『プロタゴラス ソフィストたち』 Number 10  
『経験と教育』 Number 9  
『リフレクティブ・マネジャー 一流はつねに内省する』 Number 8  
『学びとは何か 〈探究人〉になるために』 Number 7  
『教養としての認知科学』 Number 6  
『使える脳の鍛え方 成功する学習の科学』 Number 5  
『人を伸ばす力 内発と自律のすすめ』 Number 4  
『コミュニティ・オブ・プラクティス ナレッジ社会の新たな知識形態の実践』 Number 3  
『どこからそう思う? 学力をのぼす美術鑑賞 ヴィジュアルシンキング・ストラテジーズ』 Number 2  
『精神の生態学 改訂第2版』 Number 1

徳は知識として教えることができるものか否か——できるという立場をとる当代随一の知者と呼ばれるプロタゴラスは、ソクラテスの質問に答えるうちに、逆の立場に行きつく。対話を重ねることでも何ぞ知らないことを気づかせ、知のあり方をも考察していくソクラテスの姿勢は、何かを学ぶ際の理想のあり方である。

プラトン著、藤沢 令夫訳  
岩波文庫／1988年

伝統主義、進歩主義両派の教育実践の分析を踏まえ、経験の連続性・相互作用の二つの原理に基づき、絶えざる経験の再構成だとする教育観を提起した名著。アメリカを代表する哲学者・教育思想家デューイによる総合学習の導きの書として今日でも輝きを失わない。

ジョン・デューイ著、市村 尚久訳  
講談社学術文庫／2004年

組織のなかであらゆる難題を一身に背負わされるマネジャーやその予備軍にこそ学びと成長のチャンスがある。本書では、教育学と経営学という専門が異なる研究者の共同作業によって「学びのきっかけに満ちた仕事」にするためのヒントを提供。経験し、対話を行う、内省（リフレクション）することの大切さを伝える。

中原 淳、金井 壽宏著  
光文社新書／2009年

知識は断片的な事実の寄せ集めなどではない。知識を成り立たせているシステムを見つけ出し、創り上げていくことでこそ、新しい知識を生み出すことができる——子どもの語彙の習得についての認知科学の研究から、著者は「生きた知識」とは何かを考察する。旧来の知識・学習観から脱却するための入門書として最適。

今井 むつみ著  
岩波新書／2016年

知性の意外な脆さ・儂さと、それを補って余りある環境との相互作用を、記憶や思考を中心に身近なテーマでわかりやすく紹介。情報という共通言語をもとに研究が進められる認知科学によって、知られざる知性の姿が解き明かされるだけでなく、「ゆらぎの体験こそひらめきを生む」など学びのヒントを得ることもできる。

鈴木 宏昭著  
東京大学出版会／2016年

人の脳と学習法に関する最新の科学的知見を網羅した「学習の科学」の決定版。日本でも通俗的に正しいとされている一点集中型の学習方法は、実は極めて非効率で、多様性や想起練習こそが重要であることが明らかになる。認知心理学と教育をつなぐことを目指し、長年実証研究を続けてきた心理学者による話題の書。

ピーター・ブラウン、ヘンリー・ローディガー、マーク・マクダニエル著、依田 卓巳訳  
NTT出版／2016年

親と子、上司と部下、教師と生徒といった社会生活における役割は、権力関係を生み出し、上位からの統制を下位に押し付けがちである。著者はそうした外部からの統制や報酬よりも、自発的に取り組む「内発的動機づけ」が人を伸ばすこと、豊富な事例をもとに考察する。学ぶ側、学びを与える側ともに必読の一冊。

エドワード・L・デシ、リチャード・フラスト著、桜井 茂男訳  
新曜社／1999年

あるテーマに関する関心や問題を共有し、その分野の知識や技能を交流により深めていく人々の集まりである「コミュニティ・オブ・プラクティス（実践コミュニティ）」の手引書。IT主導での管理が行き詰まりを見せるなか、人と人のつながりをもとに知識を共有する学びの場の創造こそが真の企業価値を生む、と説く。

エティエンヌ・ウェンガー、リチャード・マクダーモット、ウィリアム・M・スナイダー著、野村 恭彦監修、櫻井 祐子訳  
翔泳社／2002年

さまざまな解釈が可能な美術鑑賞こそあらゆる学びの基礎となる力の育成に役立つ。ニューヨーク近代美術館の教育部部長を務めた著者が開発した教育法は、3つの問いを投げかけ、言い換えをし、発言をつなぐことで、学習者の思考や言語の発達を促し、教える側にも気づきを与える。数々の実践例が学びの参考になる。

フィリップ・ヤノウイン著、京都造形芸術大学アート・コミュニケーション研究センター訳  
淡交社／2015年

切り離された個のみに着目しがちな自然科学の思考を超えて、あらゆる物事の関係性に科学的説明の本質を見出した20世紀後半の画期的著作。精神とは関係のことであると主張するベイトソンの主張は、人間の集団における学びにまで及び、対話＝コミュニケーションが学びのプロセスそのものであることを教えてくれる。

グレゴリー・ベイトソン著、佐藤 良明訳  
新思泉社／2000年